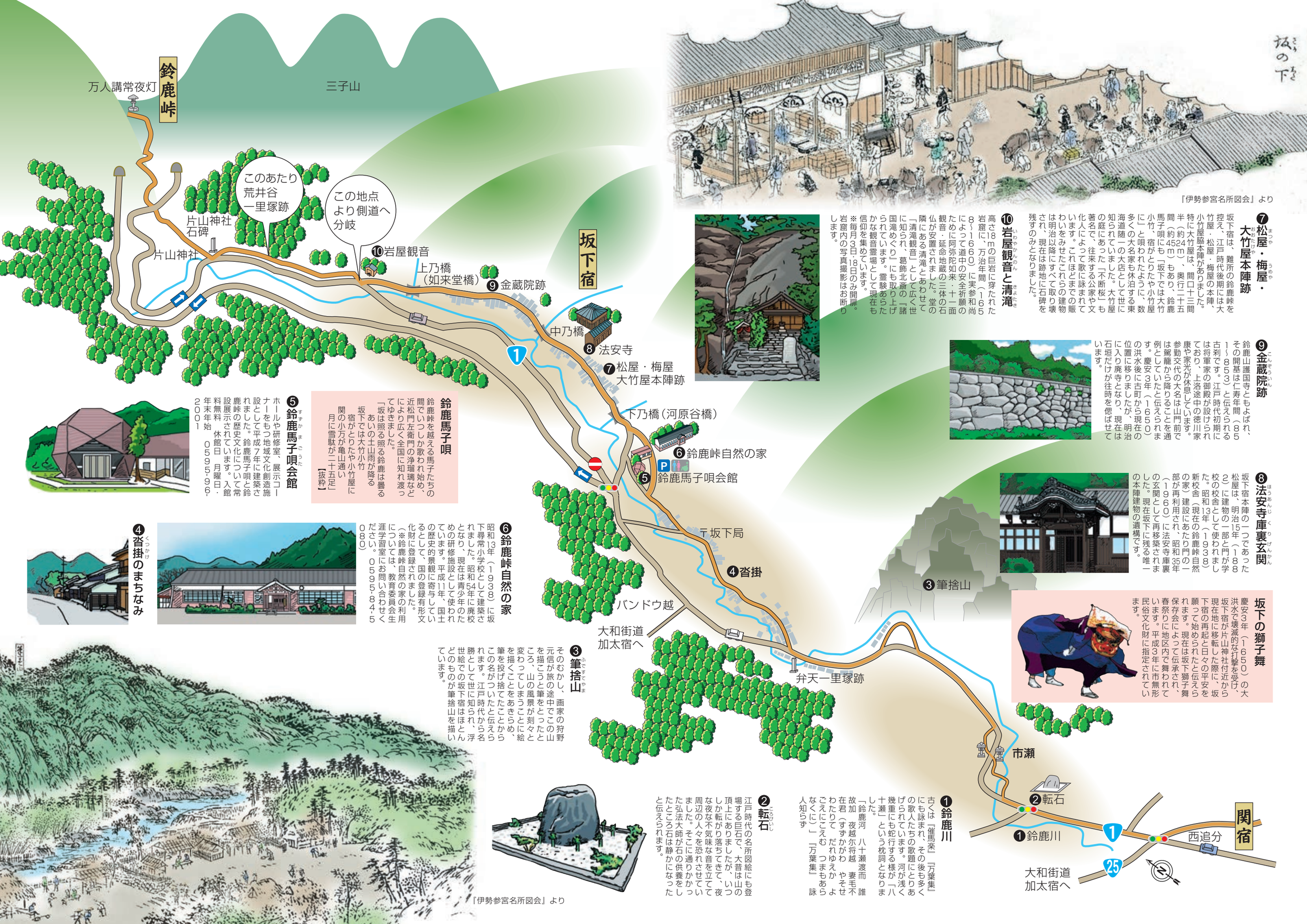


『伊勢参宮名所図会』より

⑦松屋・梅屋・大竹屋本陣跡

坂下宿は、難所の鈴鹿峠を控え、江戸時代後期には大竹屋・松屋・梅屋の本陣、小竹屋脇本陣がありました。特に大竹屋は、間口十三間半（約24m）、奥行二十五間（約45m）もあり、鈴鹿馬子唄にも「坂下では大竹小竹、宿がとりたや小竹屋に」と唄われたように、数多くの大名家も休泊する東海道随一の大店として世に知られていました。大竹屋の庭にあった「不断桜」も著名で、往来する公家や文化人によって歌に詠まれています。これほどまでの賑わいをみせたこれらの建物は明治以降にすべて取り壊され、現在は跡地に石碑を残すのみとなりました。

⑩岩屋観音と清滝

高さ18mの巨岩に穿たれた岩窟に、万治年間（1658～1660）に実参和尚によって道中の安全祈願のために阿弥陀如来・十一面観音・延命地蔵の三体の石仏が安置されました。堂の隣にある清滝とあわせて「清滝観音」として広く世に知られ、葛飾北斎の『諸国滝めぐり』にも取り上げられています。霊験あらかな観音霊場として現在も信仰を集めています。※毎月3日・18日のみ開扉。岩窟内の写真撮影はお断りします。

⑨金蔵院跡

鈴鹿山護国寺ともよばれ、その開基は仁寿年間（851～853）と伝えられる古刹です。江戸時代初期には将軍家の御殿が設けられており、上洛途中の徳川家康や家光が休息しています。参勤交代の大名は山門前では駕籠から降りることを通例としていたと伝えられます。慶安3年（1650）の洪水後に古町から現在の位置に移りましたが、明治に入り廃寺となり、現在は石垣だけが往時を偲ばせています。

⑧法安寺庫裏玄関

坂下宿本陣の一つであった松屋は、明治15年（1882）に建物の一部と門が学校の校舎として使われました。昭和13年（1938）新校舎（現在の鈴鹿峠自然の家）建設にあたり門の一部が再利用され、昭和35年（1960）に法安寺庫裏の玄関として再移築されました。現在坂下に残る唯一の本陣建物の遺構です。

坂下の獅子舞

慶安3年（1650）の大洪水で壊滅的な打撃を受け、坂下宿が片山神社付近から現在地に移転した際に、坂下宿の再起と日々の平安を願って始められたと伝えられます。現在は坂下獅子舞保存会によって伝承され、春祭りに地区内で舞われています。平成3年に市無形民俗文化財に指定されています。

⑤鈴鹿馬子唄会館

ホールや研修室、展示コーナーをもつ地域文化創造施設として平成7年に建築されました。鈴鹿馬子唄と鈴鹿峠の歴史文化について常設展示されています。入館料無料　休館日　月曜日・年末年始　0595-96-2001

鈴鹿馬子唄

鈴鹿峠を越える馬子たちの間でいつしか歌われ始め、近松門左衛門の浄瑠璃などにより広く全国に知れ渡ってゆきました。

「坂は照る照る鈴鹿は曇る
あいの土山雨が降る
坂下では大竹小竹
宿がとりたや小竹屋に
関の小万が亀山通い
月に雪駄が二十五足」【抜粋】

④沓掛のまちなみ

⑥鈴鹿峠自然の家

昭和13年（1938）に坂下尋常小学校として建築されました。昭和54年に廃校となり、現在は青少年のための研修施設として使われています。平成11年、国土の歴史的景観に寄与しているとして、国の登録有形文化財に登録されました。（※鈴鹿峠自然の家の利用については、教育委員会生涯学習室にお問い合わせください。0595-84-5080）

『伊勢参宮名所図会』より

③筆捨山

そのむかし、画家の狩野元信が旅の途中でこの山を描こうと筆をとったところ、山の風景が刻々と変わってしまうことに絵を描くことをあきらめ、筆を投げ捨てたことからこの名がついたと伝えられます。江戸時代から名勝として世に知られ、浮世絵での坂下宿はほとんどのものが筆捨山を描いています。

②転石

江戸時代の名所図絵にも登場する巨石で、大昔は山の頂上にありましたが、いつしか転がり落ちてきて、夜な夜な不気味な音を立て周辺の人々を恐れさせていました。そこに通りかかった弘法大師が石の供養をしたところ石は静かになったと伝えられます。

①鈴鹿川

古くは『催馬楽』『万葉集』にも詠まれ、その後も多くの歌人たちの歌題にとりあげられています。河が浅く幾重にも蛇行する様が「八十瀬」という枕詞となりました。

「鈴鹿河　八十瀬渡而　誰故加　夜越尓将越　妻毛不在君（すずかがわ　やそせわたりて　だれゆえか　よごえにこえむ　つまもあらなくに）」『万葉集』　詠人知らず

東海道五十三次の内

鈴鹿峠 坂下宿

イラスト案内図

坂下宿

坂下宿は、鈴鹿峠の麓に位置し、その名もその立地に由来しています。いつごろ宿が立てられたかは定かではありませんが、『宗長日記』大永4年（1524）の条に「坂の下の旅宿」とあることから、室町時代には宿として機能していたものとみられます。慶安3年（1650）の大洪水により壊滅し、1キロほど下流に移転して復興されました。江戸時代には、東海道五十三次の江戸から数えて48番目の宿場町として、鈴鹿峠を往来する多くの人々でにぎわいました。東海道難所のひとつである鈴鹿峠を控えて参勤交代の大名家などの宿泊も多く、江戸時代後半には本陣3軒、脇本陣1軒、旅籠48軒を数え東海道有数の宿にあげられます。明治23年（1890）関西鉄道の開通による通行者の激減とともに宿場としての役割を終えました。道路拡幅によって往時の景観は失われましたが、石造物などにかつての面影を留めています。

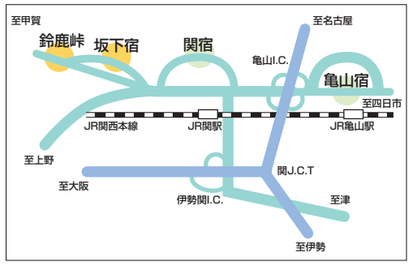
なお、「坂下」「坂ノ下」「阪之下」などの表記方法がみられますが、江戸時代の公用では「坂下」を用いることが多かったようです。

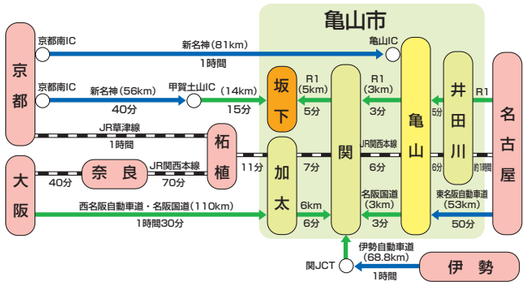
鈴鹿峠

伊勢と近江の国境にまたがる鈴鹿山の脇を縫うように越えるのが鈴鹿峠越えです。古くは「阿須波道」と呼ばれ、仁和2年（886）に開通したとされています。「鈴鹿山」は、本来は「三子山」のことを指しているとみられますが、『今昔物語』や和歌などに登場する「鈴鹿山」は鈴鹿峠越えを指しているものが多いようです。なだらかな近江側と違い、山深い「八町二十七曲り」の急な山道は、古くは山賊の話が伝えられ、江戸時代には箱根越えに次ぐ東海道の難所として知られていました。

旧東海道の関宿から鈴鹿峠までは、平成8年11月に文化庁の「歴史の道100選」に選定されています。

交通のご案内





■見学される皆様へのお願い

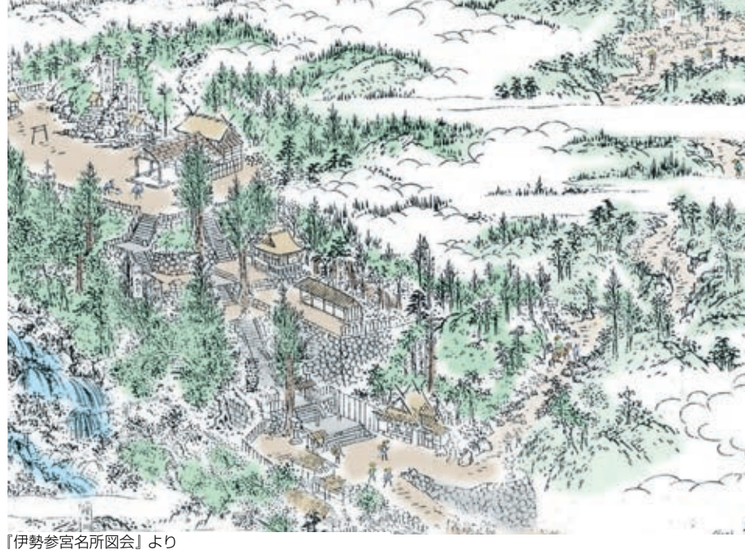
西の追分～鈴鹿峠の旧東海道の散策に当たっては次の点にご留意ください。

- 旧東海道沿道は歴史遺産であると同時に、生活の場でもあります。マナーを守って散策をお楽しみください。
- 狭い道のうえ、国道１号との交差点および重複区間は交通量が相当あります。歩行中の安全は各自十分お気をつけください。
- 公共交通機関の便がよくありません。お帰りの時間や方法などを十分に留意してください。
- 峠道は舗装や防護柵等が完備していません。各自安全には十分注意してください。
- ゴミは各自お持ち帰りください。

亀山市携帯サイト

亀山市 生活文化部 文化スポーツ課 まちなみ文化財グループ
〒519-1192　三重県亀山市関町木崎919-1
TEL〈0595〉96－1218
FAX〈0595〉96－2414
E-mail：bunkazai@city.kameyama.mie.jp

R100
古紙パルプ配合率100%再生紙を使用



『伊勢参宮名所図会』より

⑪ 古町（ふるまち）

かつての坂下宿は、片山神社の下方一帯にありました。慶安3年（1650）9月3日にこの地を襲った大洪水により埋没したため、翌年宿全体が移転しました。「古町」の地名と現在見られる平坦地はかつての宿の名残と伝えられます。

⑫ 琴（こと）の橋（きり）（桐の橋）

かつて天皇家の秘宝のひとつに和琴の「鈴鹿」がありました。この琴は鈴鹿川にかかる桐の橋板から作られたことからこの名があり、『平家物語』にも登場しています。藤原俊成が「鈴鹿川桐の古木の丸木橋これもや琴の音に通うらん」と詠んだこの橋は古町にかかる小橋のこととする説があります。

れいろくさんのそんりく ～鈴鹿山の伝説～

むかし、鈴鹿峠に鬼丸という山賊がいて、多くの旅人の命を奪っていました。ある日鬼丸の正体を知った坊さんが、鬼丸に殺される前に、「これからは、『れいろくさんのきぐわんはてうやでんのそんりく』と大声で呪文を唱えて山に入れ」と教えました。それから鬼丸は大声で呪文を唱えて悪事を重ねていましたが、ある人がこの呪文を聞いて字に書き写したところ「鈴鹿山の鬼丸は長野殿の孫六」となったため、鬼丸がかつて長野の殿様に仕えていた孫六であることがばれ、たちまち捕らえられたということです。

⑬ 片山神社と峠道入口

その由来が古代にさかのぼる延喜式内社で、鎌倉時代には現在の場所に鎮座したと伝えられます。また、斎王群行の際に皇女が休泊した「鈴鹿頓宮」の跡ともいわれています。江戸時代には鈴鹿権現とよばれ、往来する多くの人々の信仰を集めました。昭和53年に市史跡に指定されましたが平成11年に本殿などを焼失し、現在は神楽殿のみとなりました。高い石垣などにかつての面影をとどめています。

⑭ 孝子万吉（こうじまんきち）の碑

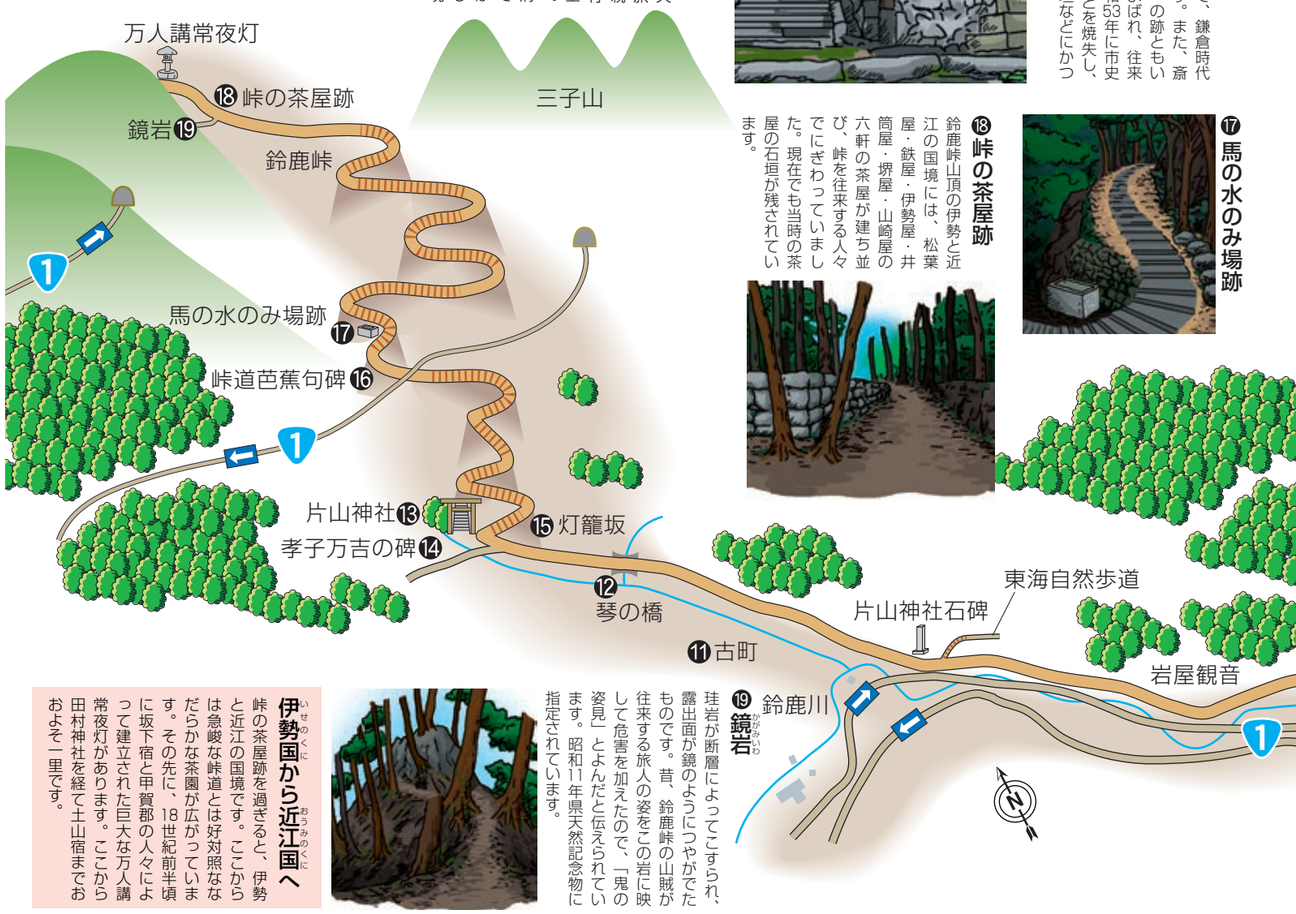
坂下古町に生まれた万吉は、4歳で父を失い、6歳から茶屋の使い走りや往来する旅人の小荷物を運んで賃銭を得て病弱な母親を助けていました。旗本の石川忠房が通行のおり、万吉の事を知り、事あるごとに金品を与えるとともに、その話を広めました。いつしか孝子万吉の話は評判となり、幕府の耳にも届き、万吉母子は江戸に召されて手厚い保護を受けました。成人した万吉は信楽代官に召抱えられ、長寿を全うしました。万吉の事跡を記した石碑が片山神社境内に建立されています。

⑮ 灯籠坂（とうろうざか）

片山神社から先の急な上り坂には、街道に灯籠が並んで設けられており、灯籠坂と呼ばれていました。

⑯ 峠道芭蕉句碑（はせをくひ）

元禄4年（1691）に刊行された、松尾芭蕉の句集『猿蓑』に詠まれた「ほっしんの初にこゆる鈴鹿山」の句が刻まれています。



⑰ 馬の水のみ場跡

⑱ 峠の茶屋跡

鈴鹿峠山頂の伊勢と近江の国境には、松葉屋・鉄屋・伊勢屋・井筒屋・堺屋・山崎屋の六軒の茶屋が建ち並び、峠を往来する人々でにぎわっていました。現在でも当時の茶屋の石垣が残されています。

⑲ 鏡岩（かがみいわ）

珪岩が断層によってこすられ、露出面が鏡のようにつやがでたものです。昔、鈴鹿峠の山賊が往来する旅人の姿をこの岩に映して危害を加えたので、「鬼の姿見」とよんだと伝えられています。昭和11年県天然記念物に指定されています。

伊勢国（いせのくに）から近江国（おうみのくに）へ

峠の茶屋跡を過ぎると、伊勢と近江の国境です。ここからは急峻な峠道とは好対照ななだらかな茶園が広がっています。その先に、18世紀前半頃に坂下宿と甲賀郡の人々によって建立された巨大な万人講常夜灯があります。ここから田村神社を経て土山宿までおよそ一里です。